連　載

新興国ウォッチ！　＜第 18 回＞

国際収支 (2)

多田　忠義

クローサー「発展段階説」の 6 段階

クローサーらによって提唱された国際収支の発展段階説は、ある一国の国際収支の各勘定が経済発展とともに 6 つの段階を経ると考えている（図表 1)。本連載で注目している新興国は、段階Ⅱ～Ⅲ（ないしⅣ）に該当するため、これらの段階を中心にくわしく見ていきたい。

まず、段階Ⅰは自国で生産可能な財が少なく、外国から輸入せざるを得ない財などが多いことから貿易・サービス収支は赤字となる。また低所得で貯蓄不足なため、工業化に必要な資金を海外から調達する必要があり、その資金に対する利払い・配当支払いのため所得収支も赤字となる。

その後、工業化がある程度進んで輸出が増加し、貿易・サービス収支が黒字に転じると段階Ⅱへ移行する。輸出産業の成長に必要な資金を海外からさらに調達することから、投資の利払いが増加し所得収支は赤字幅が拡大するほか、対外純資産のマイナス幅も拡大する。工業化の過程で、衛生環境や栄養状況がよくなり、出生率低下、扶養人口の相対的減少によって経済成長も促進される（人口ボーナス)。

さらに工業化の進展や技術進歩などによって貿易・サービス収支の黒字幅が所得収支の赤字をカバーでき、経常収支が黒字化すると、段階Ⅲへ移行する。このころになると、国民の所得水準が上昇し、国民貯蓄も増加することから中所得国へ移行する。なお、経常収支黒字が継続すると対外純債務が減少し始め、所得収支の赤字幅も縮小し、段階Ⅳへと移行する。

多様な発展段階を経る新興国経済

環境決定論的立場で考えれば、新興国は、人口、採掘可能な資源量、気候、土地生産性、文化・宗教などの環境諸要件が異なるため、同一の発展段階を経られないと容易に想像できる。また隣国や交易相手国との相互作用によって、国の発展は方向づけられる側面もあろう。こうした考えに基づけば、クローサーらの発展段階説は、現実的な新興国の姿を説明しえないといえる。しかし、国が発展していく上で他国と資源や資本の取引をする必要があり、こうした関係性に着目したこの発展段階説は、多様である新興国の発展段階を分析する基準とすることができ、多様な発展段階の中身を相対化して評価することが可能となる。

図表1　国際収支の発展段階説

	Ⅰ 未成熟債務国	Ⅱ 成熟債務国	Ⅲ 債務返済国	Ⅳ 未成熟債権国	Ⅴ 成熟債権国	Ⅵ 債権取崩国
(a) 貿易･サービス収支	赤字	黒字	黒字	黒字	赤字	赤字
(b) 所得収支	赤字	赤字	赤字	黒字	黒字	黒字
(c) 経常収支	赤字	赤字	黒字	黒字	黒字	赤字
(d) 対外純資産	マイナス	マイナス	マイナス	プラス	プラス	プラス
(e) 所得水準	低所得国		中所得国		高所得国	
(f) 人口構成	人口ボーナス				人口オーナス	

(資料) 熊倉 正修「国際収支 の発展段階説と日本経済構造変化」
http://www.komazawa-u.ac.jp/~kumakura/teaching/IE/IE_04.pdf　(2013年11月18日確認)

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載･複製を禁じます